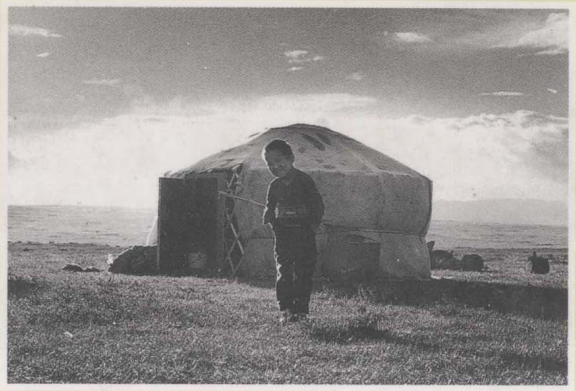
草の国の少年たち



椎名 誠

草の国の少年たち

写真・文
椎名誠

朝日新聞社

草の国の少年たち

1992年12月25日　第1刷発行

写真・文――椎名 誠
装丁――――多田 進
発行者――木下秀男
発行所――朝日新聞社
編集・書籍第一編集室　販売・出版販売部
〒104-11　東京都中央区築地5-3-2
電話:03-3545-0131(代表)　振替:東京0-1730

印刷・製本―凸版印刷株式会社

©1992 Makoto Shiina Printed in Japan ISBN4 02-256588-8
＊定価はカバーに表示してあります

ナランツァツァルは六歳で、馬がとても好きだ。二年前から馬牧民の父バトムンフに乗馬をおしえてもらっている。おしえてもらうといっても、モンゴルでは、首と足腰がしっかりしてきた歳になると、父に抱きあげられ、白樺の木でつくられている鞍にのせられ、たづなを持つように言われる。

父と一緒にそのあたりをすこし歩き回り、馬の歩くリズムと、揺れて動く自分の体のリズムを知る。

そうしてある日、バトムンフは馬と娘に「さあ行っておいで」と言うのだ。

馬と娘はゲル（白い布で囲ったモンゴル遊牧民の家）の近くを歩き、そして同じことを幾日か続けるうちに、ある日突然、草原の風にむかって走りはじめる。

ナランツァツァルはいま、一日中馬に乗っていることもできる。そうしていつか父と一緒に馬の群れを追う仕事に行きたい、と思っているが、父はまだそれを許してくれない。

父、バトムンフは、三百七十五頭の馬を政府から預かり、それを育てる仕事をしている。いい草をたくさんたべさせ、元気のいい仔馬を百四十頭ほど産ませる、というのが今年の目標だ。

馬は春に産まれる。漸く春の雪の消えた草原はまだ黄色く枯れたままで、干し草の貯えも底をつきかけている。馬牧民の春はきびしい「欠乏の春」でもあるのだ。

モンゴルの遊牧は柵を囲わず、大草原に馬を放したままだ。一夜あけると馬は草原のあちこちに散ってしまっているので、それをまず集める仕事から一日がはじまる。

馬は種馬ごとに小さなグループをつくっているので、一時間ほど走り回ると、なんとか一カ所に集めることができる。

走りながらオルカという独特の道具で馬をつかまえ、鞍をつけ替える。一頭だけを疲れさせないために、そして多くの馬に鞍やくつわを慣れさせていくために、これはとても重要なことなのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

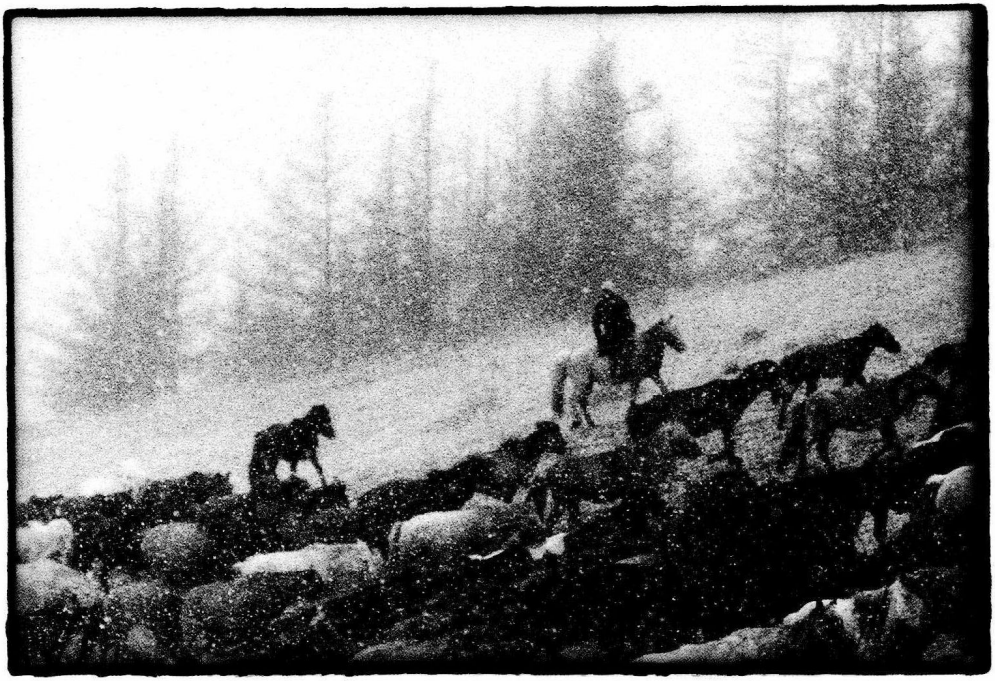
一夜のうちに仔馬が生まれていることもよくある。仔を産んだ母馬は、まだ足もとのおぼつかない仔馬のそばをはなれず、群れから孤立していることが多い。

孤立した馬を見つけると、バトムンフは全力で疾走し、親子のそばにいく。

明け方近くに産まれた小さな栗毛は、まだ背や腹が濡れたままで、春の早朝のつめたい風の中でふるえている。それでもぎこちなく四肢を張りつめ、母馬のあとについていく。

まだ凍結したままの小川がいくつかあって、仔馬がその前で困っていた。母馬は自分の体の重みで氷を割り、そこを渡っていけるのだが、仔馬は氷の上でつるんとすべってしまうのだ。

バトムンフがやってきて、自分の馬で氷を割り、仔馬の歩ける道をつくってやった。ふるえながら静かにゆっくりと小さな流れを渡り、仔馬はそこでまたすこし立ち止まって、朝のつめたい風のにおいをかいでいた。



この時期馬牧民の敵は、腹をすかせている狼と、ふいにやってくる春の吹雪だ。

狼はモンゴルの草原の悲しい王者である。かつて世界を制覇した猛々しいモンゴルのひとつの象徴として、多くのモンゴル人の心の中で静かに密かに慕われつつ、その一方で激しく嫌悪されている。馬牧民が狼に襲われると破滅的な打撃を受けるからだ。バトムンフの馬もその春一頭やられた。被害は少ないほうだったが、狼にやられると馬牧民の誇りをひどく傷つけられる。

もうひとつの大きな敵、春の吹雪がやってくると、馬を山すその林の中に隠す。春の雪は湿って重く、馬の毛に張りついて体を冷やしてしまうから油断ができない。吹雪が続いていると、交代で朝まで見張りに立つことになる。おかしなことに吹雪になると仔馬が産まれる率が高くなるのだという。

けれど春がくると、すぐに夏だ。
モンゴル最大の夏のまつり「ナーダム」の競馬に、いつか娘のナランツァツァルを出場させるのが、バトムンフの夢だ。

エンフボルト家の記念撮影。エンフボルトは羊を飼う牧民だ。三十歳。妻ツェンドアユーシとの間に三人の子供がいる。いま四人目がお腹の中で九カ月目を迎えている。来月出産というのに馬に乗り、一日中めまぐるしく働いている。

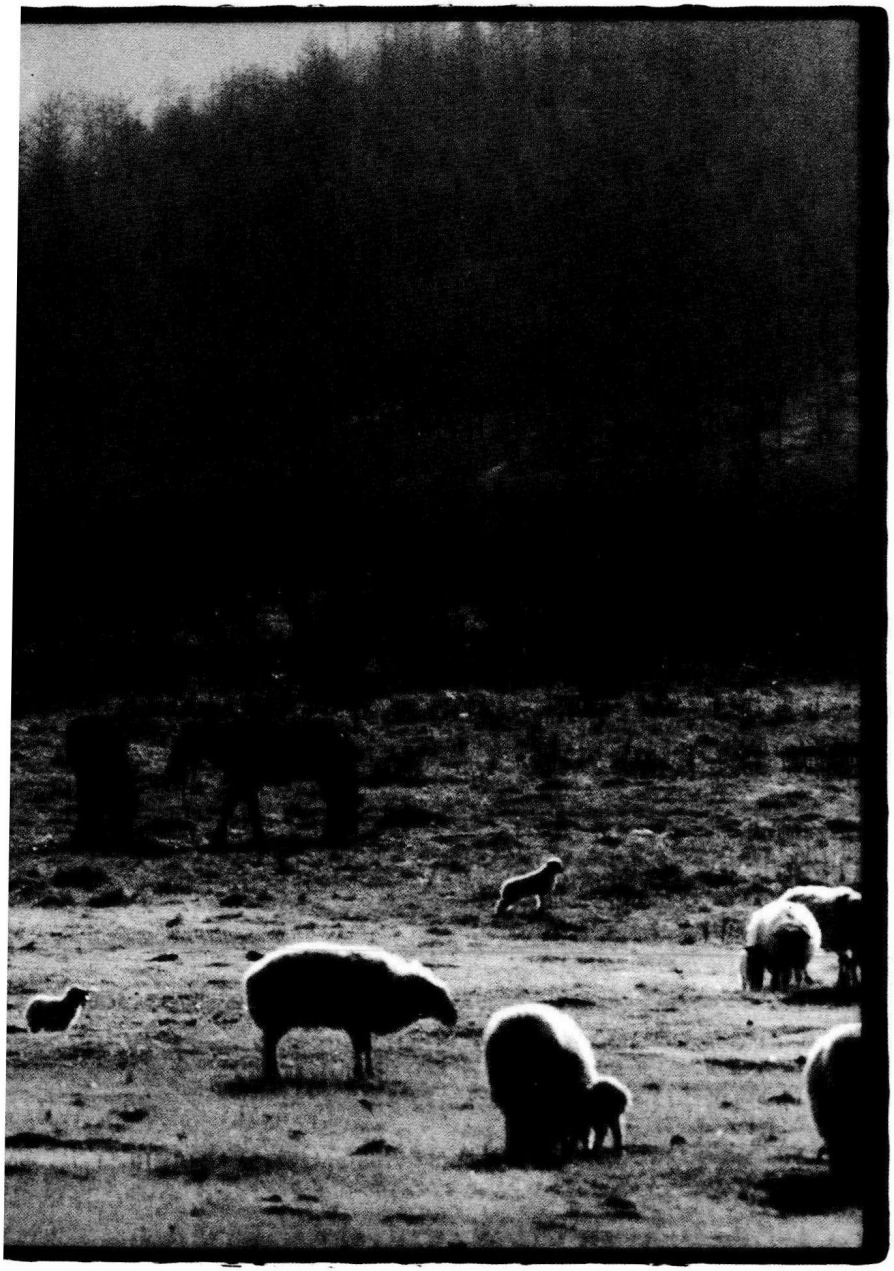
まん中で狼の帽子をかぶり、孫のナスンを膝にのせているのはエンフボルトの父アユーシである。

モンゴル遊牧民の伝統をつらぬく厳格な老人で狩りの達人。その右隣は妻のレッグマである。アユーシの左隣に立っているのは養女のホンゴルゾル。いつも桃色の布で髪の毛をうしろにきゅっとしばり、馬に乗って羊追いの手伝いをしている。エンフボルトの二番目の姉が病気で寝たきりなので、二人の子供を預っているから、この大草原の小さな家には六人の子供たちがにぎやかに生活している。

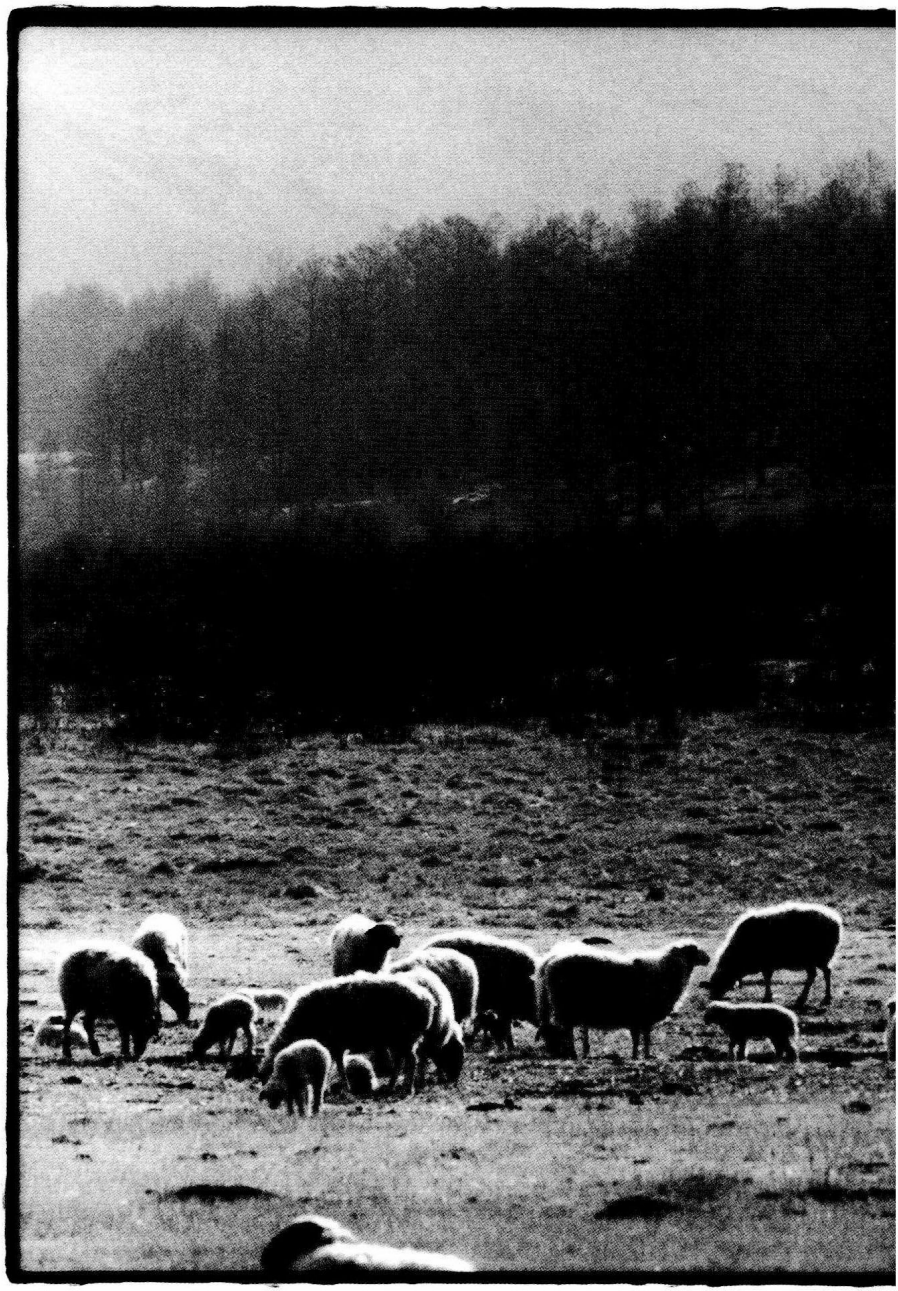
季節はつめたい風の吹く春。みんな嬉しそうに緊張している。

子供たちは朝から夕方までそれぞれ体力や能力によって自分たちの仕事をわけあたえられている。年長の者は朝の羊小舎のそうじ。糞を集めて捨てる役。もっと小さな子は餌の干し草をはこんだり、炊事用の薪を取ってきたりする。

朝のひととおりの仕事が終り朝食がすむとみんなであそぶ。いまは春休みで、九歳のホンゴルゾルと八歳のジュンチフが家にいるが、休みが終ると町の学校宿舎へ行ってしまう。お姉ちゃんがいるときに沢山おもしろいあそびをしようということをみんなして一日中考えている。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



女の子たちはチビでも女の子なのだからやっぱりおしゃれなので、大人たちの真似をして小さい頃からあたまにスカーフを巻いたり、デールの帯の赤い色によろこんだりと、草原の中にいてもいろいろ忙しい。

ムングンモリトの村の広場でむこうからやってきたそんな二人の女の子にカメラをむけると、もううれしいけど恥ずかしくて恥ずかしいけどうれしくて……。

エンフボルトの家の子供たちだけで記念撮影。いったんみんな並んだら五歳のオノンが犬も一緒に撮っておくれ、とずっとむこうの方に寝そべっていた黒犬を引っぱってきた。オノンはこの黒犬が好きで、この犬はぼくのウンコをみんなたべてしまうんだよ、とおしえてくれた。

オノンはまだ馬に乗れない。もうすこししたらエンフボルトがオノンに馬の乗り方をおしえてくれるらしい。春のあいだは一年で一番忙しいのでオノンの馬の練習は夏になってからだろう。オノンのユメは当然ナーダムで優勝することである。

エンフボルトは六百八十匹の羊を国から預っている。この春六百二十七匹の羊を出産させる計画で、いまのところ順調だ。

父アユーシの頃から収入を得るたびに増やしていた私有財産の馬と牛がこの春あわせて七十頭になった。この牛や馬からさらに新しい子を沢山産ませるのがエンフボルトのもうひとつ大事な仕事だ。

いい草を求めて、春から夏、そして秋から冬に大移動する。どの季節でも大切なのは水が近くにあること。

朝、牛に引かせて近くの川から水をはこんでくるのも遊牧民の欠かせぬ日課だ。

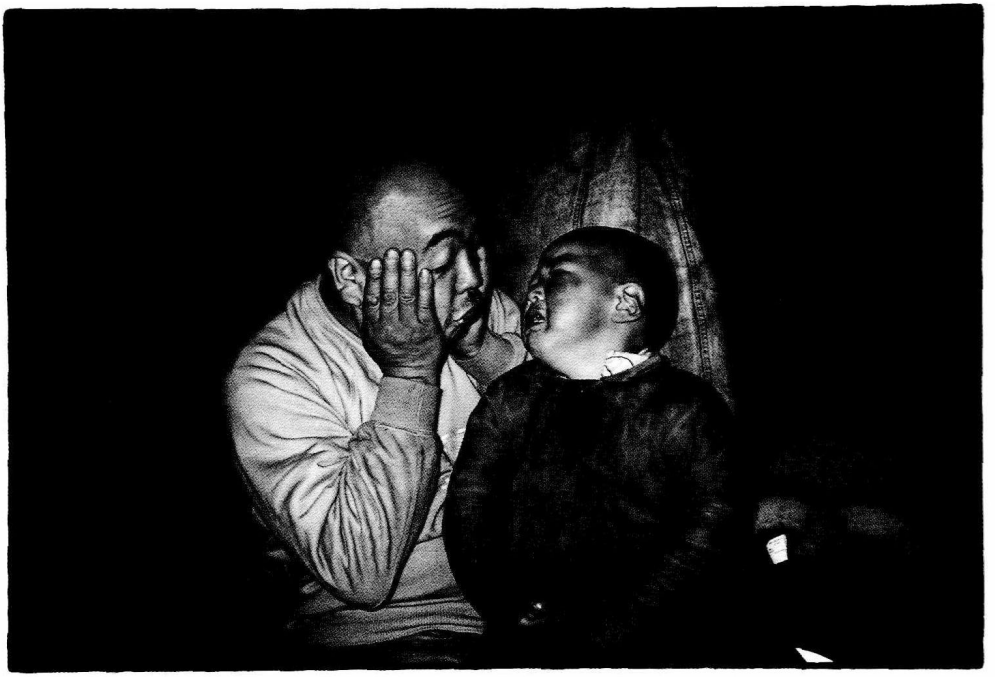
水は近くの小川から運んでくる。行ってみるとまだいたるところ厚い氷が張っていた。

馬牧民のバトムンフのゲルから羊牧民のエンフボルトのゲルまで行くのは馬で五時間ほどかかる。どの遊牧民もそれぞれが大草原にたったひとつの小さな家なのだ。

ゲルのまん中にはストーブがあって、草原の長い夜を、遊牧民はこのストーブを囲んですごす。ゲルの円形の壁ぞいに寝床があって、子供たちは小さい頃は母親と、大きくなると子供同士二、三人枕をならべて眠る。

夜更けに草原を吹きわたる風の音と、ストーブの薪がはぜる音を聞きながら眠るのはなんだかしみじみやさしくて気持がいい。

そして冬も夏もこのゲルの上は目がくらくらするほどの満天の星がでている。



エンフボルトの次男ガンバタはまだ三歳でじつによく泣く。だいたい一日に五十回くらいは泣いている。泣くとどうしてこんな小さい体からこんな声が出てくるのだ、としばしびっくりするくらいのでっかい声でとにかく全力をつかって泣き続けるのだ。

ガンバタの好きなものは「ボーズ」という肉まんじゅうだ。自分と同じようなまんまるい形をしたボーズをほおばっているときのガンバタはしあわせそうで、口から服からそこいらじゅうをボーズのアブラでべたべたにして笑っている。

こういう泣き虫のガンバタでも、やがて五、六歳になると馬を乗り回し、立派な泣かない遊牧民に育っていくのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com